様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 28 日現在

機関番号：30107
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～　2011
課題番号：20520725
研究課題名（和文）千島列島における資源・土地利用の歴史生態学的研究

研究課題名（英文）Historical Ecology on the Resources and Land Use in the Kuril Islands

研究代表者
手塚　薫（TEDUKA　KAORU）
北海学園大学・人文学部・准教授
研究者番号：40222145

研究分野：歴史生態学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：千島列島、資源・土地利用、先史文化、アイヌ、社会ネットワーク分析

１．研究計画の概要
（1）島嶼環境に進出・適応した人類の資源・土地利用に関わる戦略を検討するため、人類学的手法に加え、古生物、古環境などをも対象とする現地調査活動によって、生態環境変動のデータを測定し、それに対する人類の「脆弱性」や「耐性」を究明する。

（2）人類が島嶼地域の生物相に及ぼした影響やそれら資源が人類に及ぼした影響の相互作用、いわばエコシステムの履歴を検討する。

（3）不安定で乱獲に弱い生態系における捕食者としての人類の土地・利用戦略の変遷を捉える。現存するデータにフィールドワークによるデータを加味し、島嶼における長期間の人類－環境の相互作用を観察しうる文化システムモデルを構築する。

２．研究の進捗状況
（1）考古学上の文化編年を導入して人類の千島列島移住の過程を分析することは、一定の成果をおさめた。

（2）これまでの千島列島各地域における調査活動によって、先史期から歴史期までの 6 段階における人類の居住、定着、断絶、放棄のサイクルは種々の社会的・経済的・技術的な制度のもとで繰り返されており、人の資源・土地利用の特徴も把握できている。

（3）現地調査を実施して生態系の変動を評価するシミュレーションに必要な気象・地球系のデータを収集し、その分析結果も随時レポートした。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
先史時代の生存に不可欠な有用資源の流通に関し、千島列島各島とカムチャツカおよび北海道の関係は、資源をどのように周辺地域へ流通させるのかといった島ごとの原料調達・保存・流通の戦略と密接にかかわっていることを明らかにできた。

４．今後の研究の推進方策
これまでに得られた成果と他の分野の研究者によって報告されている成果とを統合するために、国際的なワークショップを企画する。気象・生物・地球・文化系のデータを総合的に解釈し、居住時期の断絶に関する現時点での仮説を補強するとともに、その理由に関する最終的な結論を導き出したい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
手塚薫、添田雄二、千島列島における環境変動と居住史の関係解明に向けて、無、第 37 号、2009 年、北海道開拓記念館紀要、43-58
手塚薫、千島列島における先史文化の適応と資源獲得・流通の検討、無、第 46 号、2010 年、北海学園大学人文論集、73-95
手塚薫、マンロー・谷往復書簡による社会ネ

ットワークの復元とその活用、有、第 7 号、年報　新人文学、2010 年、216-263

〔学会発表〕（計４件）
手塚薫、千島列島への移住と適応、北アジア調査研究報告会、2009 年 2 月 22 日、東京大学
添田雄二・手塚薫、小氷期や自然災害が千島アイヌに与えた影響、日本文化財科学会第 26 回大会、2009 年 7 月 12 日、名古屋大学
手塚薫、千島列島における資源・土地利用の変遷、第 11 回日本進化学会大会、2009 年 9 月 3 日、北海道大学
手塚薫、千島列島における資源・土地利用の歴史、2009 年 12 月 25 日、北海学園大学人文学会第 2 回例会、北海学園大学

〔図書〕（計４件）
手塚薫、岩田書院、千島列島への移住と適応－島嶼生物地理学という視点－、2008 年、283-311
手塚薫、北海道立北方民族博物館、千島列島に生きる－アイヌと日露・交流の歴史－、2009 年、27-29
手塚薫、同成社、比較考古学の新地平、2010 年、767-774
手塚薫、同成社、アイヌの民族考古学、2011 年、231

〔その他〕
ホームページ
http://depts.washington.edu/ikip/index.shtml
http://csde.washington.edu/kbp/kurilUs/bio/researchers.html